

# 万代の風

万代コミ協だより第35号

2020年(令和2年)2月10日

万代地域コミュニティ協議会

発行者:丸田 喜也

新潟市中央区天明町19-16

＝ 川風、海風、萬代橋 春の風はもうすぐ ＝

地域のさらなる活性化を期待  
万代地域

「コミュニティ協議会

会長:丸田 喜也



皆さまにおかれましては、健やかに新春を迎えられたことをお慶び申し上げます。また、旧年中はひとかたならぬご厚情をいただきありがとうございます。誠にありがとうございました。

令和最初の新年を迎え、新しい時代への期待が高まるなか、今年も東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が開催され、新潟にも国内外から多くの方々を訪れることが予想されます。

このようなか、万代地域においては、本市の玄関口である新潟駅の高架化も進行し、加えて流作場五差路前に高層ホテル・マンション建設が始まる予定であり、来訪者が増えることで交流人口が一層拡大し、地域のさらなる活性化が図られることを期待しているところですが、その一方で、地域の安心・安全確保に向け、防犯対策を強化する必要性が増していることも感じています。

また、近年、大きな自然災害が毎年のように全国各地で起きており、昨年も山形県沖を震源とする地震や、台風19号による大きな被害が発生しました。津波や浸水の影響

を受けやすい当地域では、特に災害への備えをしつかり行っていくことが重要と認識しています。

これらの課題への対応として、当協議会では、今後とも、地域の皆さまと情報を共有し、地域の安全パトロールや、防災訓練などに積極的に取り組み、さらには、地域の活性化が一層図られるよう、様々な事業を展開していきたいと考えておりますので、皆さまにおかれましては、本年も変わらぬお引き立ての程よろしくお願い申し上げます。

末筆ながら皆さまの健康とご多幸を心よりお祈りし、新年のご挨拶とさせていただきます。本年もよろしくお願いいたします。

花植え活動に込められた想い

万代長嶺小学校

地域教育コーディネーター

塩田 美幸

新潟市が教育ビジョンに「学・社・民(※)の融合による教育」を掲げて始まった「地域と学校パートナーシップ事業」も13年目になりました。この事業を推進し、学校と地域を結び役割を担って万代長嶺小学校に地域教育コーディネーターが配属されてから早いもので12年になります。



毎年、たくさんの方から学校

や子どもたちのためにご協力いただき、また、微力ではありましたが、地域の皆様のためにできることを考えながら務めてきました。

昨年11月、初めての試みとして3年生が万代町通商店街で花を植える活動に取り組みました。これは、万代町通りの歴史を学んだ子どもたちが、昔のように賑やかな商店街にするために自分たちでできることは何だろうと考えたことが発端でした。



子どもたちは花を植えないままにプラントナー

に花を植えたら商店街がもっと明るくなるのではないかと考え、地域の方と一緒に花植え活動をしたいと万代中央商店街会長さんに手紙を書きました。幸いにも中央区から助成金をいただくことができ、子どもたちの思いに応えようと手を挙げてくださった万代中央自治会と萬代令和町内会のご協力で、14個のプラントナーに可愛らしいピオラの花を植えることができました。

短い期間の中で打合せを重ね準備してくださった鎌倉会長様、浅妻会長様はじめ地域の皆様に心より感謝申し上げます。今年も万代町通りの一部にしか

花を植えることができずしては、この活動が徐々に広がりに広がり、いつまでもきれいな花が咲いている万代町通商店街になることを、子どもたちは願っています。



学校では3年生に限らず、学年に応じて自分たちが暮らしている地域について学び、自分たちでできることを考えています。「子どもは地域の宝」という言葉があります。少子高齢化の時代、ややもすると関心は高齢者の方に向かいがちですが、これからの地域を支えていくのは子どもたちです。

今後とも子どもたちの健やかな成長のために皆様の力をお貸しください。そして、子どもたちとの交流を深め、明るい挨拶をかわし合える町になるように、私もお手伝いさせていただきます。私もお手伝いさせていただきます。

※「学」学校 「社」公民館や図書館などの社会教育施設

「民」地域住民、家庭など

恒例の天明町もちつき

1月15日 町内多数参加して、婦人部の皆さんがなれた手つきでお餅つくり 天明会館にて



浸水災害について

新潟日報では12月に「津波  
クライシス」の連載があ

りました。12月30日の同欄には「新潟市は一度水があふれると逃げ場がない。全国的にもこれだけ低い土地はない」と地域のハザードマップで浸水の深さを確かめ家族や職場での避難の方法を考えておくことが重要だ」との指摘が印象にのこりました。

歴史をふり返ると、万代地区の浸水には「津波によるもの」「信濃川の決壊」「阿賀野川の決壊」「下越地区の集中豪雨」などが考えられます。

特に避難する際、時間との闘いになるのは「津波」です。考える余裕などあまり無く、一人一人が自主避難の判断をしなければならぬ。津波が発生すれば人的な被害も大きいだけに、普段から、避難方法を話し合い、検討する必要があります。

現在中央区役所では、海岸線のコミュニティ協議会を選びワークショップを行い「地域版自主避難マップ」を作成中です。3月までには全世帯に配布される予定で、ぜひ熟読して頂きたいと思ひます。今回から、「歴史から見る浸水災害」と題し過去の大水害をふり返って連載したいと思ひます。

歴史から見る「浸水災害」(1)

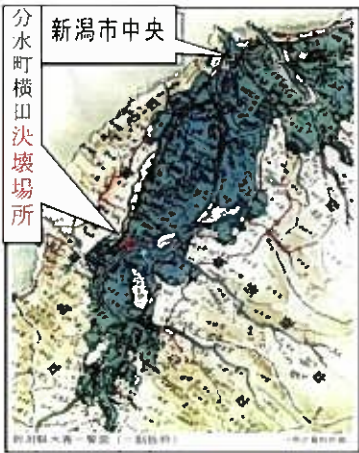
【国交省千曲川河川事務所  
洪水の歴史「横田切れ」より

明治29年7月の洪水

この年は降雨が多く、四国上空より日本列島を縦断する形で、熱帯低気圧が長野県上空を通過し、さらに梅雨前線の低気圧が通過していった。

新潟県分水地区で7月19日ころから激しい雨が降り続き、千曲川流域(長野県)では、千曲川をはじめ、支川に被害が出始めた。新潟県内の信濃川中・下流域では、各地で堤防が切れ、そのうち最も影響の大きかった破堤場所の地名(新潟県旧分水町横田)から、一般に「横田切れ」と呼ばれている。上流から下流にいくにしたがって水量や被害が急速に大きくなっていった。

被害状況は、千曲川流域では流失・浸水家屋1,000戸以上となっており、信濃川中・下流域では死傷者75人、流失家屋2,000戸となっている。以上資料よりこの時は県境がダム状態になっ



て長野盆地でも大きな水害が発生その激流に新潟の豪雨が重なり、



津波自主避難マップ作成ワークショップ

ため低い土地では11月迄、約3ヶ月に及び浸水状態にあったとい

ます。その後大河津分水が作られ信濃川の堤防も強化、さらに関屋分水も完成しました。排水能力も当時は無かったに等しい事を考えれば、各段に安全性が増してきてます。

しかし、信濃川は長野県の梓川・犀川・千曲川とその支流・新潟の魚野川等を集め流れ来るもので、その流域面積は秋田県の1県分に相当します。その広大な面積全体に雨が降り、一本の信濃川に集中すれば、いくら丈夫に作られた堤防であっても、濁流は弱い場所を見つければ越え、決壊します。台風19号の時には、大河津分水では標高17mまで水位が上昇し過去最高を記録しました。越後線の鉄橋に濁流の飛沫がかかるほどの危険水位だったので、「百年に一度の大雨」が数年後にやって来ることあるのです。maru

～ 幸福度とBRT ～

まるのぶつ 正月には多くの人々が「一年の幸せ」を願う。幸せ＝幸福度を感じる要素はたくさん有るが、「選択肢の多さ」をあげることもある。そこで「選択肢」を不評のBRTバスに当てはめ幸福度を考えた。新潟市では持続可能な公共交通体系の維持ということで、BRT導入を進め、バス路線の再編を認めた。不幸な原因ははっきりしている。全体を生かすためにと大事な幹線路線に不便な乗り換えを押しつけ「選択肢」をゼロにした。駅前ロータリーもBRT用に無駄な広場が作られタクシープールが半減した。駅で乗客を降ろすと西側の弁天3丁目付近にあるタクシー用の有料Pまで迂回し待機する。空きが出ると駅前ロータリーに移動するという無駄なルールだ。そこには、観光客・住民サービスの対応は眼中にない。BRTを新しい「選択肢」として付け加え、住民の評価を受けたなら、幸福度ももっと違ったのではないのでしょうか。丸山健一

編集後記

沼垂四つ角の割烹が閉店となってテナント募集の看板が掲出されていく。街の賑わいがまたひとつ消えていく。急激な人口減少と高齢化問題は各店舗の努力ではなかなか克服できない。東京一極集中ではなく、地域はさまざまな「夢」の集中であって、地方はさまざまな「夢」の退却である。しかし、地方で生活することは、都会と違う魅力がいっぱいあるのだから。

編集委員

田所 暁雄